

## 四国八十八ヶ所霊場

四国八十八箇所は単に 88 の寺院の総称ということだけでなく、室町時代以降に定められたとみられる 88 の寺院と急峻な山や深き谷を巡りその間にある堂を残らず巡る 488 里の修行のことであり、[江戸時代](#)頃から一般庶民も巡礼するようになってからは現生利益を求め 88 の寺院を巡る 300 有余里の札所巡拝のことである。また、江戸時代頃から[西国三十三所](#)観音霊場、[熊野詣](#)、[善光寺参り](#)など庶民の間に巡礼が流行するようになり、そのうちの一つが四国八十八箇所である。これを模して江戸時代より[小豆島](#)には[小豆島八十八箇所](#)霊場、[江戸](#)には[御府内八十八箇所](#)霊場、九州には[篠栗八十八箇所](#)霊場など、そして近年において[四国別格](#)(番外)霊場など、全国各地に大小さまざまな巡礼地が作られた。「移し」または「写し」とも呼ばれ、四国八十八箇所隆盛の証左ともいわれている。寺院には長い歴史の中で栄枯盛衰があるが、選定された時点では 88 の寺院はいずれも札所として遜色のない立派な伽藍であったであろうが、戦乱や火災により衰退の時期もあったが、現在はいずれの寺院も復興を果たしている。[阿波国](#)の霊場は「発心の道場」で 23 か寺、[土佐国](#)の霊場は「修行の道場」で 16 か寺、[伊予国](#)の霊場は「菩提の道場」で 26 か寺、[讃岐国](#)の霊場は「涅槃の道場」で 23 か寺が、88 の霊場寺院の打ち分けである。

なお、他の巡礼地と異なり、四国八十八箇所を巡ることを特に[遍路](#)といい、地元の人々は巡礼者を「お遍路さん」と呼ぶ。また、札所に参詣することを「打つ」(後述:納札の項)と表現する。そして、霊場寺院を結ぶ歩き道を[遍路道](#)といい、八十八箇所を通し打ち(後述)で巡礼した場合の全長は 1100 - 1400km 程である。距離に幅があるのは遍路道は一種類のみではなく、選択する道で距離が変わるためである。自動車を利用すると、打ち戻りと呼ばれる来た道をそのまま戻るルートや遠回りのルートが多いので、徒歩より距離が増える傾向にある。一般的に、徒歩の場合は 40 日程度、自動車や団体バスの場合で異なるが 8 日から 11 日程度で 1 巡できる。さらに、高速道路の整備により、最短で巡拝する熟練者は 5 日で 1 巡する。

### 巡拝方法

遍路は順番どおり打たなければならないわけではなく、各人の居住地や都合により、どの寺から始めてもよく、移動手段や日程行程などもさまざまである。1 度の旅で八十八箇所のすべてを廻ることを「通し打ち」、何回かに分けて巡ることを「区切り打ち」といい、区切り打ちのうち阿波、土佐、伊予、讃岐の 4 つに分けて巡礼することを特に「一国参り」という。また、順番どおり廻るのを「順打ち」、逆に廻るのを「逆打ち」という。近年は順序にこだわらず打つことを「乱れ打ち」といわれている。一般的には順打ちによる道案内がなされており、逆打ちは道に迷うといった苦労も多いため多くの御利益があるともいわれていたが<sup>[6]</sup>、現在はどちらからでも見やすく標識が設置され、さらにカーナビゲーションの普及によりどこからでも同様に行き着けるようになっている。俗説によれば、巡錫中の弘法大師に無礼を働いた伊予の豪商・[衛門三郎](#)が大師に許しを請うため遍路に出たが、20 回以上順打ちで巡礼しても追い付けず、[閏年](#)の[申年](#)に逆回りを試して出会えたという言い伝えからも、閏年に逆打ちを行うと 3 倍の御利益があるとする考えがあり、閏年には逆打ちが平年に比べ多くなる。旅行会社によっては逆打ちのツアーを組んでいるところもある。